

収穫適期（中生品種、晩生品種）

出穂期は4日程度早く、高温で成熟が早まっています。

黄化粳割合を確認し、ほ場に合わせた適期収穫を！

1 水稻収穫適期のめやす（8月20日現在）

下表を参考に刈取計画を立てておき、ほ場で黄化粳割合を必ず確認し、収穫開始の判断を行う。高温年は、収穫開始のめやすを50℃（2日）程度早め、刈り遅れに注意する。

農業気象メッシュデータ（三条市興野）を使用

品種	出穂期※1 (地域平均)	積算気温		収穫適期	
		通常年	高温年※2	通常年	高温年※2
こがねもち	7月21日	1000℃	—	8月25日頃	—
コシヒカリ	7月29日		950℃	9月3日頃	9月1日頃
新之助	8月6日	1050～1100℃	1000～1050℃	9月14～16日頃	9月12～14日頃

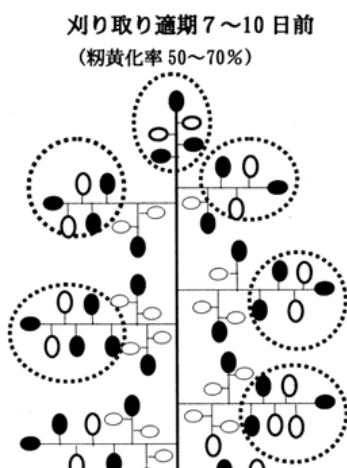
※1 「こがねもち」と「コシヒカリ」は5月連休～10日田植え、「新之助」は5月10日田植を想定

※2 高温年は通常年より積算気温が50℃（2日程度）少ない。

注）今後の気温により収穫適期は前後します。

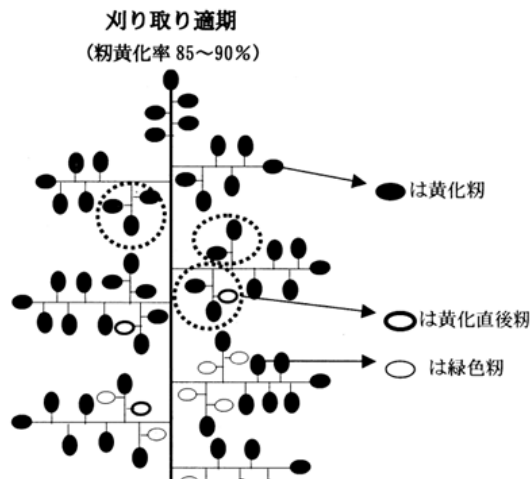
2 収穫時の粳黄化率

◎収穫適期は、黄化粳割合が85～90%くらいになった頃



図中点線内の粳（上・中位1次枝梗粳）が黄化した時が刈り取り適期7～10日前

※黄化の診断は1次枝梗が9本程度の平均的な穂について行う。調査本数は20穂程度必要である。16本以上が該当すれば7～10日前



図中点線内（上位3～4本目の1次枝梗に着生する2次枝梗粳）が黄化した時が刈り取り適期

※粳黄化の診断は1次枝梗が9本程度の平均的な穂について行う。調査本数は10穂程度必要である。8本以上が該当すれば刈り取り適期

図 粳黄化の状況と刈り取り適期（富山県）

3 土づくり

近年は気象変動が大きいので、米の収量・品質を毎年安定して確保するためには、土づくりが重要になってくる。有機質資材の特性を把握し、地力増強に向けて適切に活用する。

(1) 稲わら秋すきこみ ～ 堆肥と同様の「土づくり」効果がある ～

稲わら腐熟（分解）促進のポイント

- (1) 地温が高い収穫後の早い時期（10月中旬頃まで）にすき込む。
- (2) 深さ5～10 cmの浅うちを行う。
- (3) すき込み前の腐熟促進剤や土づくり資材の施用

※稲わらを春にすき込むとワキが発生しやすくなり、初期生育不良の原因になる。

※ニカメイチュウの多発ほ場では、稲わらや刈株に幼虫が潜伏しているため、すき込みをすることで翌年の発生減少が期待できる。

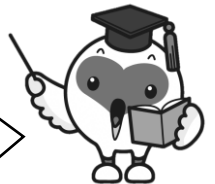
(2) もみ殻施用 ～ もみ殻は田んぼに戻してケイ酸補給 ～

もみ殻施用のポイント

- (1) 当該ほ場で得られたもみ殻（約120kg/10a）を散布量の基本とし、最大でも2倍量までとする。
- (2) 稲わらがまとまっている部分は、周辺に稲わらを散らしてからすき込む。
- (3) すき込み後はほ場の排水性を良くし、もみ殻の分解を促進させる。
→ 湿田や冬期間に湛水しやすい水田では、排水溝を作って表面水の排除に努める。

※ごま葉枯病、稲こうじ病、墨黒穂病が多発生したほ場のもみ殻や、雑草が多発し、雑草種子の混入が多いもみ殻は施用しない。

もみ殻成分の約2割はケイ酸であるため、単収480kg/10aのほ場のもみ殻（約120kg）を全て田んぼに戻すと、ケイカル（けい酸含有率30%）を約80kg/10a散布した場合と同等の効果が将来的に期待できます。



(3) 堆肥・土づくり資材の活用

県央地域にはケイ酸、リン酸が不足気味の土壌が多く見られる。各地域の土壌実態に即した土づくり資材を施用し、経済的・効果的な土づくりに努める。

～収穫後は、必ず「土づくり」を行いましょう！～